

なぜ留学僧育英会をつくつたか

善光寺住職 黒田武志

誓願

いまから十一年前といえば、わたしが住職を務めている横浜善光寺が、ちょうど開創十五周年を迎えた年です。ゼロから出発したわたしが、寺を持ち、発展させることができましたのも、みほとけのお導きと心温かい多くの方々の力添えのおかげ——これをひとつ節目としてなんとかみなさんにご恩返しができないものかと考えておりました。その具体化が、人を育てるこことだつたのです。海外に留学僧を派遣して人材の育成を図り、仏教の振興、世界の平和にいささかなりとも貢献したいと。

一寺の住職がこのような大誓願を立てましたが、「そんなことができるわけがない」と思われた方も少なくなかったのではないかと思います。でもわたしはなにごとも信念を持つて

行えば、かならず実現できると信じて生きてまいりました。このように思えるようになつたのも、若き日の貴重な体験の数々があつたからではないかと思ひます。

修行の始まり

そのときわたしは、逆方向の急行列車に乗つていたことに気づきました。まさかこの手違いが、甘えたわたしの心を叩きなおすために、ほとけさまが与えてくださつた修行の一歩となろうとは、思いもよらぬことでした。



37年秋、25歳の時日本一周托鉢に能登から出発

僧侶の兄が、開教師としてアメリカに渡ることになったのは、わたしが高校三年の夏のこと。世界中を歩いていろんなことを見てみたい。そんな夢を抱いてわたしは、ぜひ連れていつてくれと頼みました。それならまず仏教を学べ。それが兄の返事でした。それでわたしは、僧侶になる決心をして、大学で仏教を学んだのです。大学院もすませ、本山の總持寺に入りました。永平寺に入つたのも、アメリカへ行きたい一心のことでした。

せつかく寺に入つても、そういう我慢修行



ですから、ほんとうの修行ではありません。こんなことをしていて、いつたい何になるんだろうと、まったくやりきれない気持ちで下積み修行をやつておりました。こんな未熟な心でいたからでしょう。永平寺では体を壊してしまいました。それで下山して福井駅から東京に帰るつもりで、列車に乗つたという次第なのです。

列車が逆方向と気づいても、いまさら引き返すこともできず（お金を持つていませんでした）、わたしは富山まで行きました。そこには学生時代の友人がおりました。彼の勧めで托鉢たくはつをしてみると、たちまちたくさん喜捨あんぎやが集まるではないですか。これなら手持ちがないとも悠々と行脚あんぎやができる、よし、全国を回つてみようという気になり、わたしの托鉢行脚が始まったのです。いまから思えば当然のことながら、世の中よいことばかりでないことを、この長い行脚で思い知らされることになりました。

生かされていることに気づく

北陸、山陰、九州と回り、それから山陽を通つて年も暮れ近く、わたしは京都に来っていました。雨が何日も続いていました。宿を求めて、お寺の門を叩いてまわりましたが、法衣はボロボロ、草鞋履きの足はドロドロ、馬糞のような臭いを立ちのぼらせているわたしに、よい返事は帰つてきません。駅で眠るには寒すぎる。

やつと一軒の木賃宿を見つけました。そのときの所持金が三百五十円です。宿代が素泊

まりで二百五十円。銭湯（宿の主人がお風呂に入るのを嫌がる様子なので、一キロ先まで歩いて行つたのです）が十六円。コッペパンなどを買って宿に戻りました。朝から何も食べていなかつたのです。残つたお金を机の上に並べてみました。二十五円。ため息が出ました。明日の命もわからない、みすぼらしい僧侶。それがわたしの姿だつたのです。

翌朝、雨の中、宿を出て行かねばなりません。おれはいつたい何をしているんだろう。みじめさのどん底で、わたしは雨を眺めてぼんやりとしておりました。そのときです。こんな思いが突如として立ち現れたのです。おれは僧侶じやないか。自分の生活を心配している場合じやない。僧侶の役目はまずお経をあげることじやないか！ 簡単なことなんです。しかし、それまでは気づかなかつた。

霧が晴れるような思いで、わたしは宿屋のご主人に頼み込み、お経をあげさせてもらいました。お経をかみしめながら唱えていると、ご主人のやさしさがありがたく身にしみてくるのでした。こんなわたしを追い払わずに泊めてくださつたのですから。

感謝の思いでいっぱいのまま、ザンザン降りの町を、わたしは大きな声で「般若心経」を唱えて歩きました。門前払いの言葉も、わたしを磨いてくださる声に聞こえました。午後を過ぎて雨も上がりだしたころです。女子校の前を通りかかりましたら、ひとりの女学生から十円の喜捨……その十円の尊さ、ありがたさ！ 気づくとわたしは土下座をして感謝を申し上げていたのです。すると次々とみなさんがご喜捨してくださいました。

こんなわたしなどに、なんてもつたないこと。感謝で胸が詰まりそうになつたその瞬



タイ・ワットパクナムにて得度式

間、太陽の光がサーツとわたしの目に射し込んだきました。ああ、わたしは生かされている！この身はほとけさまにおまかせしていればいいのだ！一人ひとりの中にほとけさまはいらっしゃる！……このときの感動をどう表現したらいいものか…。

それからです。状況は同じでも、心の中は豊かでやさしいだ思いで満たされるようになりました。怖いこともうれしいことも超越して、これでいいという心境になることができたのです。

どんな体験も修行である

全国行脚を終え、わたしは再び總持寺に入りました。自らの意志です。三年間の修行のうち、タイで一年学び、アメリカへ発つたのはそれからです。十八歳のときに夢見たアメリカでしたが、実現したのは三十を過ぎてか

らでした。しかしです。もしわたしは、簡単にアメリカ行きを許されいたら、人の尊さ、ありがたさに気づかぬまま、うわべだけの仏教論を説いていたことでしょう。

わたしが若い僧侶を見るとき、どうしてもあのころの自分と照らし合わせてします。どんなつらい体験も、みじめな体験も、すべて修行となり、肥やしとなる。あのときの感動を多くの人々と共に味わいたい。そんな気持ちが、わたしに「育英会」をつくらせたのです。

註 仏教コミックス通信『しん』（鈴木

出版株発行／一九九四年十二月二十日）に掲載されたものです。本

文は次のように紹介されました。

――弘法大師空海は、わが国ではじめて庶民のための学校をつくった人である。仏教に限らず広い学問を学べる場を、授業料はおろか生活費まで保障するシステムだったという。空海が求めたのは、大衆の救済であつた。教育の普及はその大きな柱といつてよいだろう。

時代は下つて現代。宗派を超えて、個人で起こした育英会がある。今回はその人物にご登場願い、なぜ育英会を設立したのかを伺つた。」